

1 研究の内容

(1) 研究テーマ「対話するからだ」を目指して

感染症の影響により、身体観に大きな変化が起こっている。社会的距離、非接触など、他者やモノとの対話が難しい状況が続き、これまで当たり前だと思ってかかわってきた関係を問い直さざるを得ない環境へと変化しつつある。それと同時に、日々健康が脅かされる可能性がある環境下に置かれる身として、子どもたちにおいても、自分自身の健康に対する意識も必然的に高まってきているといつてよいのではないだろうか。

「対話」という言葉は矛盾するように聞こえるかもしれないが、この環境下だからこそ、より自己－他者－モノと対話するからだであること・なっていくことが重要であると考え。

「対話するからだ」とは、自己－他者－モノとの関係を見つめ、各々との関係の中で互いに影響を及ぼし合いながら、自己の在り様を自らの意思で創造・成長・変化・維持させていこうとするからだであること・なっていくことを意味する。体育部会では、この「対話するからだ」が「学びをあむ」子どもたちにとって、土台となる身体観であると考え、本テーマを設定している。

「対話するからだ」であること、またはなっていくことの重要性について、その理由として以下のようものが考えられるだろう。

- ・社会との接点としてのからだだが、対話的応答関係をもつことができることによって、ひらかれた自己の創造につながる。
- ・対話するからだをもつ人は、他者やモノとの関係から学ぶ応答関係を大切に「聴く」姿勢をもっているといえ、その姿勢が社会の形成者としての市民として必要な資質である。
- ・自己と対話することができるからだをもつことで、社会の中にある自己のあり方を相対化させることができ、アレント（2007）のいう「一者の中の二者」¹⁾をもつことにつながる。
- ・他者やモノとの対話によって、関係の中から運動のおもしろさを味わったり他者やモノと触れ合ったりすることができる。例えば、他者との協働によって歩調を合わせる、他者の力を感じる、モノを自在に操作する、などが挙げられる。
- ・関係が遮断されていくこの環境下において、からだが対話的であるということは、自分のからだを守ることに繋がる。自己と対話することで、自分の心身の健康状態を把握するとともに、周囲との関係をとらえ、反応し、自身を制御することができるようになる（逆に敏感になりすぎて苦しむこともあると考えられる）。

「対話するからだ」である・なっていくためには、自分のからだに向き合い、自分自身のからだを知ることが重要な視点である。体育の学びにおいては、実際に運動することを通して、自分のからだとは他者やモノとの関係に気付いたり、他者やモノから働きかけられて自分のからだの状態に気が付いたりすることが起こる。意識・無意識にかかわらず、実際にやってみて、感じたり気付いたりしたことを通して、自分自身のからだへの理解を深め、その後の運動とのかかわりについて試行錯誤したり考えたりする営みによって、より自分自身のからだへの感度が高まっていくと考える。しかし、子ども自身本人が運動することによって得られたおもしろい感じや違和感などに立ち止まることなく、やり過ぎしてしまうこともあるため、子どもがそれらの感じや気付きを得られているかどうかを見極める必要がある。必要に応じて、他者とのかかわりによる振り返りがなされることも方法の一つといえよう。

また、健康について考える学びにおいても、日常の生活に目を向け、立ち止まり、自分自身の生活を見つめたり、他者やモノと対話したりすることで、自分への気付きが促される。例えば、他者と感染症対策の認識を確かめ合うことによって、自分自身の認識に気が付いていく、といった具合である。この学びにおいても、自分はどのように考えているのか、客観的なデータと自分を比較したら何が見えるのか、な

ど、普段何気なく通り過ぎていく“当たり前”を問い直したり見直したりすることが必要になってくる。

さらにいえば、自分のからだを通して、他者やモノとかかわる中で様々な他者やモノとの関係に気が付くことも重要な視点といえる。例えば、二人三脚、ブラインドランナーとの伴走、長縄跳びの回し手と跳ぶ人のリズムなどが挙げられるだろうか。変化する相手の体の状態を聞き取ろうとすること、異質さそのものに「ふれる」ことによる自－他の交感など^{2) 3)}、かかわりによって様々なことに気が付き、自分のからだとの境界を意識的にとらえようとする感度を育むことが肝要である。「非接触」が叫ばれる昨今ではなかなか難しいことではあるが、接触せずして「ふれあう」ことを模索し、その機会を保障していくことができるかを考えていくことが求められる。

こうした感度を体育の学びを通して育んでいく具体的な方策を、実践を通して検討し、提案していくことが、本テーマによる研究の目的である。

(2) 研究の視点

① からだを通した対話に着目した体育の学びとその見とり

身体的接触が困難な中、体育の学びにおいてからだを通した対話に着目した学びをどのように展開することができるか、という喫緊の課題がある。これまで当たり前だと思われてきたことができない状況において、子どものからだや身体観は既に変化してきているかもしれない。そうすると、場合によっては、これまで体育の学びで大切にしてきたからだを通した対話のあり方を変えていかないといけないかもしれない。という危機感をもちながらも、どのような体育を展開すれば、からだを通した対話を実現することができるか、検討することが求められる。今年度、試行錯誤しながら取り組んできた実践を見つめ、そのあり方を問うこととしたい。

また、本テーマの実現に向けて重要なのは、からだを通した対話の見とりである。教師が自分とは違う他者が、自分とどのように対話しているのか、他者やモノとからだを通した対話によって何を得ているのかなどをとらえられなければ、子どもの学びを意味づけることはできないと考える。教師は子どもたちの対話をどのように受けとり、意味づけ、かかわってきたのかを実践を通じて検討したい。

② 「学びをあむ」体育の環境・カリキュラムデザインの検討

体育においても、全体テーマ「学びをあむ」と関連させ、「自ら学びを構想し、他者と関わりながら主体的に探究する」ための環境・カリキュラムデザインのあり方を模索する必要がある。「対話するからだ」を土台として、子どもたちが自分のからだや運動への興味に基づき、自ら活動を選択したり創造したりすることで、運動とのかかわりにおいて「学びをあむ」と考えるからである。まずは、実践を積み重ね、子どもたちの姿から、そのあり方について検討したい。

③ 日常の生活に目を向け、立ち止まり、自分自身の生活を問い直す保健教育のあり方を模索する

昨今の状況においては、これまでよりも自分自身の健康や健康に関する情報への関心が高まっているといえる。しかし、それが常態化することによって、自分自身の行動や信念に疑いの目を持たなくなり、何のためにその行動をしているのか、なぜそれが有効かといった問いが薄れていってしまう可能性がある。保健教育では、何かを教師から伝達するというよりは、むしろ生活の中で日常的に取り組まれていることから問題を立ち上げ、「中断」⁴⁾することによる学びのあり方を検討する必要がある。例えば、「なぜ毎日体温を測っているのか、測ることについてどう思うか」「感染予防のために必要な取り組みとは何か」などといったことである。こうしたことを他者と互いの生活経験を交換し合うこと、互いの考えを聴きあうことによって、自己の健康との向き合い方に揺らぎが生まれると考える。対話を通して、健康について子どもたちがどのように自己を見つめ、変化していくのか、実践を通して検討し、保健教育のあり方を問い直したい。

2 授業実践から見た子どもたちの学ぶ姿

(1) 5年生「休校中の課題を生かし、かかわりの中で〈動き〉を深める」

① 自分で好きな動きを見つける休校中の課題

今年度、コロナウイルスの感染拡大防止などの対策を行う中、ダンスの果たす役割の大きさに改めて

気づいた。ダンスは一人でもグループでかかわりながらも踊れる。自由に踊るダンスには勝敗など無関係である。自分のペースでゆったり踊ることもできれば、新しい動きに挑戦することもできる。好きな音楽をからだ全体で受け止め、自分のからだを通して表現する。自分や他者、いろいろなモノと対話しながら自分の動きを深め広めていくことができるのである。

子どもたちは体を動かすことが好きであるが、今できる動きにのみ留まらず、様々な動きを経験することによって、自分の体や動きをコントロールし様々な動きを楽しめるようになっていくはずである。普通の体育の授業でも、子どもたちが未体験の新しい動きの刺激を与えることを大切にしている。

そこで、コロナウイルスの感染拡大防止のための4・5月の在宅学習をチャンスととらえ、実際に体を動かす体育の課題として5年生に試みたのが「わたしのおすすめダンス・体操！」である。

この課題の意図は、①休校で友達とかかわれない分、自分と向き合い自分で好きな曲や動きを見つける機会とできること、また、②子どもたちが運動する機会が減ることが懸念される中、継続して体を動かすことを習慣化する必要があることなどである。

② 課題の内容

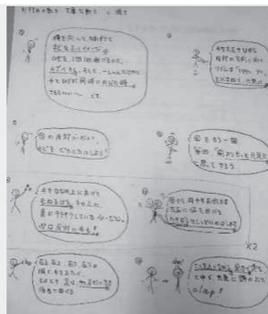
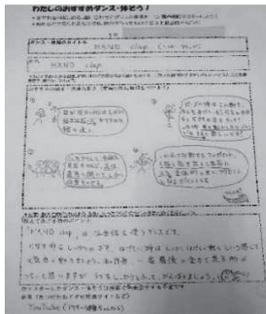
「わたしのおすすめダンス・体操！」

自分の好きな曲に合わせて、毎日家でダンスや体操をしましょう。

例えば「パプリカ」のようにきまったダンスを覚えて、楽しく踊れるようになるとか、ラジオ体操を毎日練習するとか、ダンスでも体操でもいいですので、一つは完璧にマスターしましょう。完璧というのとは、曲が流れたら、頭で考えるより先に体が動いてしまうということです。どんなダンスや体操をマスターしたのか、プリントにまとめておきましょう。授業が始まったら発表会をする予定です。また、お友達にも教えてあげるつもりで練習にはげてください。

③ 子どもたちの取り組み

記録用紙では、次のようにポイントをおさえ、内容の充実を目指した。



*動画などで見られるものでも、自分で作ってもOK（1分以上動き続けること）

*「おすすめ・大事な動き」には、体のどの部分をよく動かせるとか、こういう風に動くとおもしろいとか考えたことを書きます。裏も使いましょう。

*友達に教えてあげられるよう、先生になったつもりでポイントをまとめておきましょう。

写真1 子どもが書いたプリント。裏まで丁寧に踊り方をまとめている

| グループ | 順番 | タイトル | 曲 |
|------|----|-------------------------|-------------------------|
| A | 1 | 恋ダンス | 恋 |
| | 1 | 恋ダンス | 恋 |
| | 2 | 今日にエール | 星影のエール(朝の連ドラ) |
| | 3 | パプリカダンス | パプリカ |
| | 3 | パプリカ！！ | パプリカ |
| B | 4 | 動かそう！ | The Sun Goes Down |
| | 5 | ヘビーローテーション | ヘビーローテーション |
| | 1 | ムキムキダンス | チケマツッヨ！ |
| | 2 | ラジオ体操 | ラジオ体操第1 |
| | 3 | 体操電車 | 線路は続くよどこまでも |
| | 4 | パプリカ色のように | パプリカ |
| C | 5 | HAND clap | HAND clap |
| | 6 | The Fitness Marshall | Me Too |
| | 1 | パプリカダンス | ダンスingヒーロー |
| | 2 | TWICEのTT(1番) | TT(1番) |
| | 3 | 回るダンス | Happiness(嵐) |
| | 4 | ラジオ体操第1・2 | ラジオ体操第1・2 |
| D | 5 | ヤハヤハ筋肉元気体操 〜レッグレイズ体操 | ヤハヤハ筋肉元気体操 〜レッグレイズ体操 |
| | 6 | かんたんにできるようなダンス(ダンス) | エビカニクス |
| | 1 | ラジオ体操第1 | ラジオ体操第1 |
| | 1 | ラジオ体操第1 | ラジオ体操第1 |
| | 2 | エール2020 | 君の夢は僕の夢(ボカリスエットCM) |
| | 3 | 寝る前の軽運動 | トルコ行進曲 |
| E | 4 | がんばってやってみよう やってみよう | やってみよう |
| | 5 | キッズエアエルカムダンス | キッズエアオーバー |
| | 6 | 毎朝体操！！ | ラジオ体操第1 |

<子どもたちの記録用紙より>

多く選ばれた曲 約100名中

- ①ラジオ体操 18名
- ②パプリカ 11名
- ③Hand clap 7名

他にも洋楽からクラシックまでバリエーションの多さにも驚いた。

図1はあるクラスの例である。

子どもたちが互いに教えあうためのグループを作った一覧である。

多くの子どもたちは動画などを見てプリントには主に動き方を書いていたが、友達に教えるポイントとして

「のぼす時は思い切り遠くまでしっかりとのぼす」「ひざを柔らかくしてリズムをとる」

「常に筋肉を意識する」「一つ一つ大きな動きで大切に動く」「フリーの部分は元気よく大きく動く」

「キレが大切」

など、子どもたち自身の言葉でどのような動きをめざすかがまとめられていた。その中には今までの体育で常に伝えてきたこと「大きく、はっきり、思い切り（でもケガしない）」も含まれており、体育学

習の積み重ねに加えて、自分で自分の動きと向き合うことで、子どもたちが自分の選んだダンス・体操の動きのポイントをつかんできたことが感じられた。

④ 授業の場で

学校が再開し、コロナウイルス感染対策の手探りをしながら体育を始められたのは7月に入ってから。そのため1学期の授業実施は7回だったが、充実した時間となった。少人数で間隔をあげ、からだでの対話を意識させながら学習していった。

ア 学習の流れ

【コーチと選手】 2時間 写真2

初めは2人組で体をほぐす運動から。子どもたちの運動不足、体力の低下が感じられ、また熱中症対策も考えての内容である。相手を見ながら必要な運動をまず一人が考えて行い（コーチ）、もう一人が真似をする（選手）。コーチと選手は適宜交代し、言葉ではなく動きで伝えること、



ステップもよく見てまねる 写真2

相手のことをよく見て必要な運動を行うことなど、密を避けつつグループとしての活動につなげるよう意図して働きかけた。

子どもたちは相手の様子を感じながら、お互いに真似をして一緒にたくさん動くことを楽しんでいた。

【おすすめダンス・体操 グループ練習】 5時間

*<コーチの発表と練習のやり方>

- まずコーチが見本を見せる。
- グループのメンバーに教えながらいっしょに動いて練習する。
- メンバーがマスターしたとコーチが判断したら、次の曲に挑戦する。

*練習した曲の中から、お気に入り（他のグループに発表する）1～2曲を選んで練習。

*グループごとに発表し、クラス全員で踊って楽しむ。

イ 子どもの様子と教師の関わり

実際に家で踊っていた子とそうでない子の差が分かりやすかったが、グループのメンバーに何か伝えねばいけないという責任があり、それぞれが動きに取り組んでいる様子が見られた。周りの子も新しい動きを期待して受け入れ、お互いに教え合うことで動きのポイントに気づいたり（写真3）、コツを伝えたり



大きく跳んで！ 写真3

りする（写真4）様子が見られた。初めて挑戦する動きも、繰り返し練習してできるようになると子どもたちは達成感を感じていた。5年生は恥ずかしさが出てくる年頃でもあるが、友達と一緒に動く安心感に加え、「大きく、はっきり、思い切り（でもケガしない）」をめあてとしてお互いに見合うことが刺激となり、伸び伸びとした動きにつながっていった。授業時間だけでなく自主練習がしたいと、休み時間にも集まって、汗びっしょりになりながら子どもたちが自分で選んで身につけた動きを本当に楽しんでいるのが伝わり、ダンスのもつ力の大きさを感じた。

⑤ 対話するからだ

外出自粛中、限られた動きの繰り返しのみで、動きの多様性が失われていた子どもも多かったことは容易に想像できる。その中でダンスは、日常とは違う動きを提供してくれていた。自分で選び、自分の責任で自主的に練習をする。そして、お互いに伝え合う。これは自分や相手のからだと対話しながらの、主体的な深い学びとなっていると考える。「一人で踊るより、みんなで踊るのが楽しい」と子どもたちが言っていたのが印象的である。一人ひとりの課題がかかわりあう対話的な学びに変わっていく、授業場面の意義も見えたと言えよう。

（2）6年生（保健）「健康について考えよう」

① はじめに

新型コロナウイルスの世界規模での感染拡大によって、私たちは改めて新しい感染症の恐ろしさを痛

感することとなった。感染の拡大とともに様々な情報や噂が飛び交う中、信頼できる健康情報かどうかを見極める力が問われているといえる。そして、子どもたちも、テレビなどで見た情報を何の疑いもなく鵜呑みにしていないだろうか、そもそも、正しい健康情報の探し方を知っているのだろうか、という疑問が浮かんだ。そこで、感染が猛威をふるい、収束が見通せない今だからこそできるヘルスリテラシーに重点を置いた授業を行うことにした。

② ヘルスリテラシーとは

ヘルスリテラシーとは、「健康や医療に関する情報を入手し、理解して評価し、活用する力」⁵⁾のこと(図1)である。健康を保持増進するためには、まずは信頼できる情報に適切にアクセスし



図1 ヘルスリテラシーのプロセス

て、正しい情報かどうかをきちんと見抜く力が必要である。次に、その情報をもとに行動を起こすか起こさないかの意思決定を行い、行動につなげることが必要である。また、ヘルスリテラシーは、これからの情報化社会をたくましく生き抜いていくために必要な認知的・社会的スキルであり、“健康を決める力”⁶⁾ともいわれ、子どもの頃から積み重ね、身に付けていくことが大切であるとされる。

③ 授業の実際

ア 単元名「病気の予防」

イ 単元について

健康は自らの生活の質を高めたり、自己実現に近づいたりするための一つの手段であるといえる。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、人々の生活は様々なかたちで制限され、生き方そのものにも大きな

| 健康チェックカード | | | | | | | | | | 年 組 番 | |
|-----------|--------|----------------------------|---|---|------|-------|------|------|------|-------|-----------|
| 平 熱 | | アレルギー性鼻炎や喘息の診断の有無 (なし・あり) | | | | | | | | 名 前 : | |
| ℃ | | 交感 なしあり 最終 月 日 病歴 なしあり () | | | | | | | | | |
| 発熱 | 目日 (曜) | 体温 | 咳 | 痰 | 喉の痛み | 鼻水 | 鼻づまり | 目の痛み | 目の腫れ | その他 | 学 校 医 生 印 |
| 12/1 | 火 | ℃ | ○ | ○ | なし | あり() | ○ | ○ | ○ | | |
| 12/2 | 水 | ℃ | ○ | ○ | なし | あり() | ○ | ○ | ○ | | |
| 12/3 | 木 | ℃ | ○ | ○ | なし | あり() | ○ | ○ | ○ | | |
| 12/4 | 金 | ℃ | ○ | ○ | なし | あり() | ○ | ○ | ○ | | |
| 12/5 | 土 | ℃ | ○ | ○ | なし | あり() | ○ | ○ | ○ | | |
| 12/7 | 日 | ℃ | ○ | ○ | なし | あり() | ○ | ○ | ○ | | |
| 12/15 | 火 | ℃ | ○ | ○ | なし | あり() | ○ | ○ | ○ | | |

※ 本人または保護者(※2)に下記いずれかの症状が1つでもある場合は、コロナ対策による出席停止となりますので、お休みをしてください。
 ※ 発熱(1℃以上の発熱)として「平熱」と異なる発熱 ※ 発熱があるいは発熱の疑いがある場合は、必ずしも1つとは限りません。
 ※ 咳(乾咳、痰を伴った咳、夜間咳、起床時咳) ※ 喉の痛み(喉の腫れ、声がかたくなる、声が出ない、声がかたくなる) ※ 鼻水(水様、粘性、膿性) ※ 鼻づまり(鼻の詰まり、鼻の詰まり)
 ※ 目の痛み(目の腫れ、目の赤み、目の痒み) ※ 目の腫れ(目の腫れ、目の赤み、目の痒み) ※ 目の腫れ(目の腫れ、目の赤み、目の痒み)
 ※ 喘息(呼吸困難、呼吸困難、呼吸困難) ※ 喘息(呼吸困難、呼吸困難、呼吸困難) ※ 喘息(呼吸困難、呼吸困難、呼吸困難)
 ※ アレルギー性鼻炎(鼻水、鼻水、鼻水) ※ アレルギー性鼻炎(鼻水、鼻水、鼻水) ※ アレルギー性鼻炎(鼻水、鼻水、鼻水)
 ※ 感染症(下痢、嘔吐) ※ 感染症(下痢、嘔吐) ※ 感染症(下痢、嘔吐) ※ 感染症(下痢、嘔吐) ※ 感染症(下痢、嘔吐)

図2 健康チェックカード

影響を及ぼしている。約3ヶ月の休校期間を経て、学校の新しい生活様式にも徐々に慣れた子どもたちであるが、感染者が増大しているにもかかわらず、感染対策への意識が薄れ、緊張感がなくなりつつある。休校期間中の4月から記入している健康チェックカード(図2)にも記入漏れだけではなく、検温をしていなかったり、カードを忘れていたりする子どもが日々絶えない。

そこで、この学習を通して、先行きが見えない状況の中、これからの生活で、新型コロナウイルスにかかわらず、新しい健康問題が出てきたときに、“健康を決める力”を発揮させ、どのように対応するかを自分で考えて行動し、生涯にわたって主体的に健康の保持増進をする子どもになってほしいと願っている。

ウ 学習指導計画 (全3時間)

第1時：健康チェックカードの意味について考えよう

(ねらい)

- これまで約8ヶ月間にわたり書いてきたカードについて、立ち止まって振り返り、自分の健康状態や何のために記入しているのか、お互いの考えを聴きあうことで、感染対策への意識や自分自身の健康について見つめ直す。

第2時：病気の起こり方と健康情報を見きわめるための方法を知ろう

(ねらい)

- 病気や健康とは、どのような状態のことをさすのかを考え、病気の要因には、病原体、体の抵抗力の低下、健康によくない生活行動、環境の変化などがかわり合って起こることに気付く。
- 健康情報を使いこなすためのポイント(見つける・理解する・評価する・利用する)があることを知り、正しい情報を入手するための方法を学ぶ。

第3時：健康について“てつがく”しよう

(ねらい)

- ・ヘルスリテラシーによって、病気のかかりにくさや、かかった場合の対処方法が変わってくることに気づき、健康情報を活用（意思決定し、行動する）するための方法を考えることができる。
- ・健康に生きていくために大切なことは何かについて、互いの考えを聴きあい、自分にとっての健康について考えることができる。

エ 授業（第1時）の実際と振り返り

「自分の健康チェックカードを見て、どんなことを感じますか」という問いかけに対する「ずいぶん、無駄なことをしているんだなあ」というC1児の発言を皮切りに、無駄かどうか、という問いで対話が進んだ。C1児は普段からカードを忘れがちで、その都度、必要性や理由を説明しても、「こんな書いて何の意味があるの?」と言いながら立ち去ってしまう子どもで、最後まで無駄だと繰り返し、自分の意見を主張し続けていた。その中で、記入することで健康を意識することができるから、決して無駄だというわけではないというC3児の意見に賛同しつつも、カードに記入しても熱があれば学校は休むのだからカードを毎朝、登校時に教員に見せる意味はない、体温を測り、書くことや保護者に確認してもらうことが面倒くさい、時間の無駄だと次々に本音を語った子どもたち。そして、C6児のように書く意味も見せる意味もあると言った子どもや、カードにつけることを毎日こんなにやったんだと自分をほめたい、と振り返る子どももいた。このように、様々な他者の意見を聴きあうことで、毎日、検温して健康状態を記入する意味について、立ち止まり、考えるきっかけになったのではないだろうか。

| | |
|--|--|
| <p>C1: ずいぶん、無駄なことをしているんだなあ。 C2: 朝、測らなくて学校に行った場合、本当は熱があったら私もいろいろな人にうつしてしまう可能性があるし、逆に周りからもらって、もっと苦しむ可能性もある。だから、毎朝の検温と体調の管理は必要。だから、無駄じゃないと私は思います。 C1: 明らかに無駄です! C3: ぼくはカードを見せること自体は意味がないかもしれないけど、37℃以上(※)とかだと学校に来れないというのがあるから、できるだけ健康にしようという、心の中で心がけることができるから、健康を意識することができるから、いいと思います。 C4: C3君、すごい! (拍手が鳴り止まない) C5: でも明らかに熱が高いときは学校に来ないことはわかるのに、なんで見せるのかなって。 YT: ああ、チェックして、書いてみて、なんで見せるのかなって。C5さんのなんで見せるの?に答えられる人いますか? C6: 書く意味と見せる意味があるんですけど。まず、書く意味は、後から見たときに、自分の平熱がどれくらいかってバツと見てわかる。いつもこんな感じだとなつてわかるのと、あと、見せるっていうのは、人によってこれは高いっていう観点が違うじゃないですか。だから自分的には普通でしょ、って思うかもしれないけど、周りの人から見たら、この人ちょっと高いんじゃないって思うことになるから、ちゃんといろんな人の目で、っていっても、その日は1人(の先生)しか見ないけど、いろんな人の目を通すことは大事。</p> | <p>YT: 付け足しとかありますか? C7: さっきの見せる意味とかに関連するんですけど、多分みなさん、健康チェックカードって、やる意味はあるとは思いますが、面倒くさいと思うんですよ。(うなづく子ども多数) C8: 面倒くさいね。 C6: 面倒くさくないよ! 数字書いただけじゃな。 C9: まあまあ、いいんじゃない! C7: だって時間をとるじゃないですか。ほとんどの人、本当は面倒くさいと内心は思っていると思うんですよ。けど、例えば算数のドリルの宿題と一緒に、宿題というのかな、課題みたいなものを課すからこそ、さっき、C3君が言ってくれたような、えっと、健康を意識できる、習慣づけとかになるんじゃないかな。 C8: 習慣づけか。 C6: ほう、なるほど。 C10: 健康チェックカードを見せる意味っていうのは、私が思うに、単純に、見せないやっつけない人がいるからじゃないですか。さぼろうと思えば、さぼれるし。 C11: さぼろうと思えば、さぼれるよ。適当に書いて(ハンコを押すジェスチャーをしながら)ポンポンポンってやればいいんだよ。 YT…養護教諭 ()は筆者加筆 ※お茶の水女子大学附属学校園の発熱による出席停止の基準は、37℃ではなく、1℃程度の上昇を目安として、平熱を上回る場合</p> |
|--|--|

また、健康チェックカードについて振り返ることで、カードそのものだけではなく、学校に行くことの意味や健康に対する様々な思いがあることが分かった。次時以降の授業では、コロナ渦にいる子どもたちが自身の健康について見つめ直し、今、学校や家庭で行っている感染対策が個人の健康だけではなく、集団や社会の健康にも関係していることを、対話を通して考えていきたい。そして、自分で考えて行動でき、生涯にわたって自他および社会の健康を考えていこうとする力を育みたいと考えている。

3 今後に向けて

「対話するからだ」である・なっていく実践やアセスメントのあり方については、実践と教師の省察の積み重ねが必要である。子どもの思いや感じに寄り添うことで、学びをあむ子どもの学びを支える教師の在り方を継続して模索したい。合わせて、研究の視点に挙げたカリキュラムデザインについて、子どもが自ら「学びをあむ」という視点からとらえ直し、提案することを目指したい。

(江部・神谷・栗原・長田)

【引用・参考文献】

- 1) ハンナ・アレント (2007) 「責任と判断」筑摩書房 pp.112-120
- 2) 鷺田清一 (1999) 「聴くことの力」阪急コミュニケーションズ pp.189-190
- 3) 伊藤亜紗 (2020) 「手の倫理」講談社選書メチエ pp.112-147
- 4) 小玉重夫 (2013) 「学力幻想」ちくま新書 pp.158-159
- 5) 中山和弘 (2016) 『第1章 ヘルスリテラシーとは』、福田洋・江口泰正編「ヘルスリテラシー：健康教育の新しいキーワード」大修館書店 pp.1-22
- 6) 中山和弘「健康を決める力」Web ページ< <https://www.healthliteracy.jp/> > (最終アクセス 2021年1月5日)